

2025 年 2 月 20 日

武蔵野美術大学 学長 殿

海外研修報告書

下記の通り、海外研修の報告をいたします。

記

氏名	細井 えみか	所属	共通彫塑研究室
		職位	助教

研究課題	中東における現代美術と歴史的建築物の視察
研究先機関	イスタンブール現代美術館、ギョレメ野外博物館、ジャミール・アーツ・センター、シェイク・ザイード・グランド・モスク、ほか
主な滞在地 (国・都市名)	トルコ共和国・アラブ首長国連邦
渡航日程	2025 年 1 月 18 日 ～ 2025 年 1 月 31 日 (14 日間)
研究目的・理由	近年では“ラグジュアリー”を研究テーマの一つとして、日常風景や生活空間から抜粋した要素を再構成し、鑑賞者が自身の記憶を辿る体験を通して、人がどのように「既知」から自らの「安心」や「抛り所」を作り出すのかを制作研究してきた。中でも、偶像崇拜が禁止されているイスラム教において、具体的なモチーフなしに煌びやかさや荘厳さを表現するイスラム建築には、装飾性や空間的特徴の視点から大きな関心を寄せている。本研修では、モスクや宮殿など多様なイスラム建築視察のほか、トルコ共和国およびアラブ首長国連邦（主にドバイ）の美術館を訪ね、中東における現代アートシーンの視察を行う。
研究成果発表予定 (展覧会、著書、論文発表等)	・グループ展「象牙の塔からの不条理主義者」伊勢丹新宿アートギャラリー（2025 年 2 月 12 日～25 日）、ビームスジャパンビーギャラリー（2025 年 2 月 8 日～25 日）ほか ・個展「Pink nose」エステルオカダアートギャラリー（2025 年 3 月 6 日～23 日）

1. 研修の目的

彫刻は単なる立体物ではなく、空間や時間と対話しながら成立するものだとは私は考えている。今回の研修では、トルコとアラブ首長国連邦の歴史的建築や遺跡、現代美術の展示を巡ることで、彫刻が空間とどのように共鳴するのかを探究することを目的とした。特に、イスラム建築に見られる幾何学的装飾や光の使い方、歴史的遺跡が持つ時間の積層が、彫刻表現にどのような影響を与えるかを考察したいと考えた。また、中東の現代美術がどのように伝統と革新を融合させているのかを学び、自身の制作に活かすことも重要な目的のひとつであった。

この研修では、都市の中の建築と自然が作り上げた空間の両方を訪れることで、人工的な彫刻と自然が生み出す彫刻の関係性についても考察したいと考えた。イスラム建築に見られる装飾の繰り返しや、幾何学模様が持つリズムが、彫刻のフォルムや構造に応用できるのではないかという仮説を持ちながら視察を行った。さらに、各都市における美術館での展示や、環境との関係性を考慮したアート作品に触れることで、彫刻が持つ社会的・文化的な役割についても深く理解したいと考えた。

2. 研修内容

(1) モスク建築における空間の彫刻性

・アヤソフィア（トルコ）

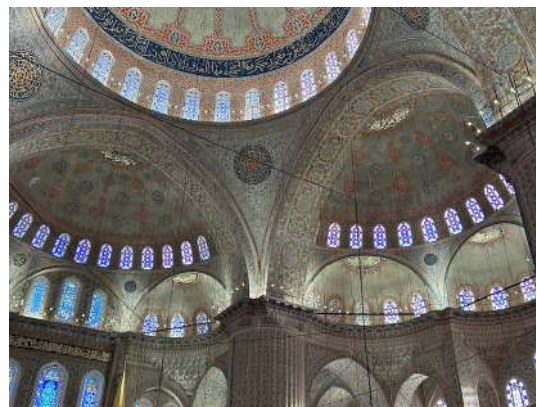
アヤソフィアは、ビザンチン建築とイスラム建築が交差する象徴的な空間だった。天井から降り注ぐ光が静かに空間を動かし、壁面のモザイクや書が視線の動きを誘導していた。私は、彫刻において「光の当たり方が形を決定する」ことに関心があるが、アヤソフィアではまさに光が空間を彫刻しているようだった。



アヤソフィア内観

・スルタン・アフメト・モスク（トルコ）

イズニックタイルによる幾何学模様の連続性が印象的で、反復するパターンが視覚的なリズムを生み出していた。私の作品においても、「形の繰り返し」が空間に与える影響を探る試みを行っているが、ここではその原理が建築規模で展開されていた。



スルタン・アフメト・モスク内観

研究内容

・シェイク・ザイド・グランド・モスク (UAE)

アブダビにあるシェイク・ザイド・グランド・モスクは、イスラム建築の伝統的な要素と現代技術の融合が見事に実現された建築である。巨大な白い大理石のドームと、金や半貴石を用いた装飾は、伝統的なイスラム建築の荘厳さを継承しながらも、最新の建築技術によって精密に仕上げられていた。内部には世界最大の手織りカーペットが広がり、巨大なシャンデリアが天井から吊るされている。その場に立つと、装飾がただ視覚的な美しさを提供するだけでなく、空間全体の印象を統一し、静寂と崇高さを強調する役割を果たしていることを実感した。

特に印象的だったのは、内部の壁面に施されたフローラルモチーフの象嵌装飾である。彫刻においても、装飾が持つ「触れたいくなるような質感」や「光との相互作用」を取り入れることで、視覚だけでなく身体的な感覚にも訴えることができるのではないかと感じた。



外観 (部分)



象嵌による内装 (部分)

・カスール・アル・ワタン (UAE)

建築内部は、細密な幾何学模様とカリグラフィーによって埋め尽くされ、光が壁や天井に反射することで、装飾が空間全体と一体化していた。特に宮殿の中心ホールでは、巨大なドーム天井に施された金色の幾何学模様が、光の当たり方によって異なる表情を見せるように計算されていた。特に印象的だったのは、装飾の「レイヤー感」である。天井の模様が層をなして重なり合い、遠近感を強調することで、より壮大な空間を作り出していた。また、大理石やガラス、金属といった異なる素材が組み合わさっている点も興味深かった。彫刻においても、異素材を組み合わせることで、光や空間の印象を変化させることができるのではないかと感じた。まさに「豪華絢爛」であった。



カスール・アル・ワタン内観

研究内容

・ジュメイラ・モスク (UAE)

ジュメイラ・モスクは、ファーティマ朝の建築様式を基にした伝統的なモスクであり、細密な石の装飾が特徴的だった。ファサードのアーチやミナレットは、幾何学模様の彫刻によって飾られ、日差しの角度によって異なる陰影が生まれていた。内部に入ると、天井には手描きのアラベスク模様が描かれており、礼拝空間の静謐な雰囲気に対してカラフルな差し色が特異であった。



ジュメイラ・モスク外観



ジュメイラ・モスクのカラフルな内観

・シティウォーク・モスクと DIFG モスク (UAE)

シティウォーク・モスクと DIFG モスクは、従来のモスク建築が持つ「神聖な礼拝空間」という枠を超え、都市のシンボルや公共空間としての役割を果たしていた。特に、外観のデザインがミニマルで洗練されているため、都市景観に溶け込む設計がなされていた（ただし、他のモスク同様にムスリム以外の入館はできないようであった）。また、これらのモスクでは、「光」が重要な役割を果たしており、自然光や人工照明を巧みに利用しているようだった。



シティ・ウォーク・モスク外観



DIFG モスク外観



礼拝施設を表すアイコンによって、初めてモスクであると認識できる

研究内容

(2) 岩窟群における生活空間について

・ギョレメ野外博物館およびカイマクル地下都市（トルコ）

カイマクル地下都市は、何世紀にもわたって岩を掘削し、居住空間を拡張してきた都市構造を持つ。この空間は、壁を「積み上げる」西洋的な建築とは異なり、「削り出す」ことで生まれる彫刻的な建築であった。内部に入ると、洞窟状の通路や広場が連続し、開放と閉鎖のバランスが絶妙に取られていた。私はこれまで、彫刻を「素材を削ることで形を生み出す」プロセスとして捉えてきたが、この地下都市では、それが巨大なスケールで実現されていることに驚かされた。

彫刻作品においても、内部空間を意識した構造を取り入れることで、観る者が作品の内外を行き来するような体験を生み出せるのではないかと考えた。また、光がほとんど入らない地下都市の特性から、「光と闇」が空間の印象を劇的に変えることを実感し、照明の使い方についても新たな視点を得ることができた。



ギョレメ野外博物館



ギョレメに広がる岩窟群

・ウチヒサル城（トルコ）

カッパドキアの象徴的なランドマークであるウチヒサル城は、自然の岩山が要塞へと変貌した例だった。

長い年月を経て侵食された岩肌のテクスチャは、まるで時間が作り出した作品のように感じられた。「削ることで空間を生み出す」というのは彫刻的な思考に基づくものであるが、自然と人工の境界が曖昧になった建築であると感じた。



ウチヒサル城

(3) 時間経過による影響

・エフェス遺跡（トルコ）

エフェスは、古代ギリシャ・ローマの建築様式を色濃く残した遺跡であり、セルシウス図書館や円形劇場など、彫刻的な装飾が随所に見られた。崩壊することで新たな意味を持つ造形物として関心が湧くとともに、崩れ落ちた柱や壁は、完全な形を失っているにもかかわらず、歴史の積層を感じさせる要素となっていた。

研究内容



エフェス遺跡

・ヒエラポリス遺跡とパムッカレ（トルコ）

ヒエラポリス遺跡は、温泉地として栄えた都市遺跡であり、パムッカレの石灰棚と隣接していた。石灰棚は、水の流れによって自然に形成された造形であった。特に、石灰が堆積することで生まれる滑らかな曲線や、層をなして広がる構造は、人の手では生み出せない自然の造形美だった。また、白い石灰が光を反射することで、昼と夜で異なる表情を見せる点も興味深かった。

(4) 現代アートと空間の対話

・イスタンブール現代美術館（トルコ）

イスタンブール現代美術館は、ボスポラス海峡に面したロケーションにあり、海の広がりや都市の景観が同時に楽しめる美術館だった。この美術館の空間構成は非常に洗練されており、開放的なガラス張りの壁面が外部環境とのつながりを強く意識させていた。私はこれまで、作品を展示する際の空間の在り方について考えてきたが、この美術館の設計は、作品と環境の相互作用を最大限に引き出していると感じた。企画展の内容もさることながら、建物自体のロケーションや、自由に出入りできる屋上テラスの存在も相まって、より展示空間について考えるきっかけとなった。



企画展《Floating Islands》より



美術館屋上よりモスクを臨む

研究内容

・ジャミール・アーツ・センター (UAE)

ジャミール・アーツ・センターでは、《Three Tired Tigers》と《Tâm Tã - Soaked in the Long Rain》の2つの展示を鑑賞し、それぞれが異なる視点から空間と物質性を探求している点に注目した。《Three Tired Tigers》では、彫刻やインスタレーションを通じて、文化的アイデンティティや労働の象徴性についての作品が多くあった。《Tâm Tã - Soaked in the Long Rain》は、水や湿度、時間の経過をテーマにした作品が多く、特に素材が変化するプロセスが空間に与える影響に強く興味を持った。私はこれまで彫刻を固定された形態として捉えていたが、この展示では「流動的な状態」や「変化する要素」が重要視されており、時間の概念を取り入れた作品の可能性を模索するきっかけとなった。



ジャミール・アーツ・センターにて



ジャミール・アーツ・センターにて

(5) 装飾美の精神性について

・ドバイ奇跡の庭園 (UAE)

ドバイ奇跡の庭園は、砂漠地帯に突如現れる人工的な花園として、その規模と色彩の派手さに圧倒されたが、同時に「自然とは何か？」という疑問を抱かせる場所でもあった。膨大な量の水を使い、完璧に管理された植物が幾何学的に配置されている光景は、まるでテーマパークのような人工美の極致であり、「制御された自然」の象徴のように感じた。一方で、その過剰な装飾性と均一性は、イスラム建築に見られる装飾美の「意味」や「精神性」とは対照的で、表面的な視覚効果だけを追求したデザインの限界を感じさせた。ここでは装飾があくまで消費の対象として機能している点に違和感を覚えた。ドバイ奇跡の庭園は、技術と資本によって作られた「理想の庭」といった印象を受けた。



ドバイ奇跡の庭園

研究内容	3. 研修を通じて 今回の研修を通じて、私は彫刻における「空間」「装飾」「時間」について深く考える機会を得た。トルコとアラブ首長国連邦という異なる文化圏での建築や美術作品を体感することで、私の研究テーマと、それらを新たな視点で拡張する可能性を見出すことができた。 (1) 空間と彫刻 私はこれまで、「彫刻とは独立した存在ではなく、空間の中で成り立つもの」であると考え、作品を制作してきた。今回の研修で訪れたイスタンブール現代美術館での展示は、まさに「空間を彫刻する」という私の制作アプローチと響き合うものであった。 また、カイマクル地下都市では、人工的に削り出された洞窟空間が、まるで「人間の手による彫刻作品」のように感じられた。ここでは「彫ること」自体が建築と一体化していた。 (2) 装飾と彫刻について イスラム建築においては、装飾は単なる美的要素ではなく、建築そのものと一体化した存在であることを学んだ。アヤソフィア、スルタン・アフメト・モスクやシェイク・ザイド・グランド・モスクでは、タイルの幾何学模様やカリグラフィが、建築空間を形作る重要な要素となっていた。今回の研修を通じて、「装飾」という概念についてより深く考えるようになった。 また、トルコ・イスラム美術博物館では、伝統的な木彫の装飾が多数展示されていた。これらの装飾は、物理的な厚みを持たずとも、空間のリズムを生み出している点が興味深かった。 (3) 時間と彫刻について 私は作品は「時間の痕跡を刻むもの」であり、制作を「生きていることを確かめる行為」として捉え、制作研究を行ってきた。 エフェス遺跡では、セルシウス図書館のファサードが一部崩れながらも、その「欠落」が逆に時間の流れを可視化し、新たな意味を持っていた。この「不完全さ」は、観る者に想像の余白を与え、作品が時間とともに変容していくことの価値を改めて感じさせた。 また、パムッカレの石灰棚では、水の流れによって長い時間をかけて作られた「自然の彫刻」であった。このような「時間が生み出す彫刻」という視点で見ると、シェイク・ザイド・グランド・モスクの大理石の床や柱も、長い年月を経て磨き上げられた質感が荘厳さを生み出していることに気づく。一方で、シティウォーク・モスクやDIFGモスクのような現代的なモスクは、最新の建築技術によって、時間の影響を受けにくい素材やデザインが採用されている。それらは伝統的なモスクとは異なり、長い歴史の積み重ねによる変容ではなく、むしろ「永続的な完成」を目指しているように見えた。時間は、彫刻を静的なものではなく、変容し続ける存在として捉え直すきっかけになりうると考える。これからの制作において、風化や変化をポジティブな要素として取り入れ、時間との対話を生む作品を探求していきたい。
大学授業における研究成果の還元	私の助教在任期間がコロナ禍の海外渡航自粛時期と3年重なり、また後半は業務引き継ぎの時期であったことなどにより、本研修は2024年度の授業期間終了後に実施せざるを得なかった。そのため、本年度の授業にて研究成果を直接還元することは叶わないが、2025年度に向けた授業準備において、資料作成等で研究成果を貢献できるよう努める。

研究日程（全滞在期間）

出発日 (現地時間)	出発地 (国・都市名)	到着日 (現地時間)	到着地 (国・都市名)	研究内容等	滞在 日数
1月18日	日本・東京	1月19日	トルコ・イスタンブール	イスタンブール現代美術館、トルコ・イスラム美術博物館、イスタンブール地下宮殿、アヤソフィア、スルタン・アフメトモスクなどを視察	4日間
1月22日	トルコ・イスタンブール	1月22日	トルコ・ギョレメ	カイマクル地下都市、鳩の谷、ギョレメ野外博物館、ウチヒサル城、バックル教会などを視察	3日間
1月24日	トルコ・ギョレメ	1月25日	トルコ・デニズリ	ヒエラポリス遺跡、エフェス遺跡、パムッカレ、聖母マリアの家などを視察	3日間
1月27日	トルコ・デニズリ	1月28日	アラブ首長国連邦・ドバイ	ジャミール・アーツ・センター、シェイク・ザイード・グランド・モスク、カスール・アル・ワタン、ジュメイラ・モスク、シティウォーク・モスク、DIFGモスク、ドバイ奇跡の庭園などを視察	3日間
1月31日	アラブ首長国連邦・ドバイ	1月31日	日本・東京	移動日	
備考					

以上

※ 欄が不足する場合は、適宜、行を挿入するなどして記入してください。別紙添付も可。

※ その他特記事項等がある場合は、備考欄に記入してください。